

国立国会図書館

タイトル『増補花壇大全 6巻』 請求記号 特1-2510

ガラス使用

○菊の記
一更尋ハ秋をよとわく獨晩秋よ
まよとわくまよなよ花の陽通
圓子も花の貴い座来調明も
香も花の物く名で公候よの上
和名は花の物く綴て今今の名
今中朝菊を二百餘花を内
花名圓記す一筆のさか一月令



特1
2510

菊は昔も花とて後別ハ美花なり其花を
室は昔も花とて今も花は漏るお花は
防備と有る志の人様よと金一

○菊の種よそのあはれ

一夫。野土。○肥るち成推く冬五の夜を
かけくゆく転くをゆるまをやまげく地は
あさ毎ひ書をわけ乾くは花は細りあ
二月の中より花はあはれよと一夫は
もてたふと書書を極くは二日とのあはれ

おゆく根あつれが山をゆく花を落す
あはれは早をよそぬの道を通りて花を
くまらぬ

二五八。留種 ○名のよりめおるれ花をさる

そ幹をさるるあはれはあはれは
とらぬのあはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれはあはれは

三



二六〇。分^{ワケ}秋^{アキ}〇ま^マの^ノ及^キ秋^{アキ}を^ハ多^クは^シす
 根^ネは^ハ葉^ハより^モ多く^クして^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を

二六一。養^{ヤウ}養^{ヤウ}〇ま^マの^ノ及^キ秋^{アキ}を^ハ多^クは^シす
 根^ネは^ハ葉^ハより^モ多く^クして^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を
 用^ニ由^リに^シて^ハ赤^キの^ハ葉^ハより^モ多^クなる^{コト}を



八六。理緝○菊つら中なる時長ざり先
 じつちんちんちん言ふ枝とさぐり短く
 けしとさしばささ枝をさげしむの枝
 るさそふちをさして油さぐりしむるハ口実業
 治さ七八又をさ六十条小なるは二十条業
 車菊^{クルマク}葉^{エハ}の枝ハ^{ヒメクサ}楊枝^{ヤウジ}より干むるさぐり
 たらぬ

八六。種類の菊^{タナ}漸く長ざり時竹さして
 法は菊^{タナ}の根^ネを揺ざししむ葉の傍^{ハナ}は葉^{エハ}

菊^{タナ}の甲^カととどろよわけハ^カ枝^エありて^カ甲^カは
 ちほりまるとさぐりしむ葉^エのあはれ菊^{タナ}
 とて^カ通^スり^カの^カ虫^{ムシ}後^{ノチ}の^カ時^{トキ}花^ハの^カ葉^{エハ}と
 たこのふちをさして油さぐりしむ枝^エは
 又^カ虫^{ムシ}さぐり^カの^カ葉^{エハ}あり^カあさ^カ難^ガ葉^{エハ}とま
 り^カ種^カべし^カ凡^カと^カ葉^{エハ}の^カ香^カあり^カぬ^カは^カ枝^エの^カが^カり^カ
 菊^{タナ}の^カ時^{トキ}ハ^カ法^カを^カさ^カし^カて^カ長^カざ^カり^カて^カ
 是^カと^カさ^カり^カハ^カ菊^{タナ}の^カ葉^{エハ}と^カさ^カり^カて^カ風^カ
 けし^カと^カさ^カり^カて^カさ^カる^カべし



○芋と接ぎの蛇虫の事 養同



蛇虫と云ふは、
植物の根を食ふ虫也。

いふ如きの肥るるうらまむと云の根切と云は、
本根を食ふが如く、
引込くを食ふは、
引込くを食ふは、
引込くを食ふは、

いふの如く、
大根の如く、
大根の如く、
大根の如く、

蛇虫 田舎まゝハあがら〜と云ふは、
あつと云ふは、
あつと云ふは、



いふ如きの陽、
いふ如きの陽、
いふ如きの陽、
いふ如きの陽、

いふの如く、
いふの如く、
いふの如く、
いふの如く、



いふの如く、
いふの如く、
いふの如く、
いふの如く、

いふ如きの又ハ、
いふ如きの又ハ、
いふ如きの又ハ、
いふ如きの又ハ、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

一 菊



大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

二 葛



大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

大守の根すもりの物と云ふは、
大守の根すもりの物と云ふは、

24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47

一 菊虎



菊虎は菊を食むるや一に花を食むるや

は虫の古のやうに生む宿根をうくは花を
あぐり推へ

は虫の古のやうに生む宿根をうくは花を
あぐり推へ

一 豆虫



豆虫は豆を食むるや一に花を食むるや

は虫の古のやうに生む宿根をうくは花を
あぐり推へ

豆虫は豆を食むるや一に花を食むるや

は虫の古のやうに生む宿根をうくは花を
あぐり推へ

は虫の古のやうに生む宿根をうくは花を
あぐり推へ

一 象乾法

象乾法の用は

或は書は豆虫とわかれは今扱どもは穢葉者

象乾法は鉄線摩練の完乾之と何叶ハ



一 蛭



蛭多きは種よき也
其持ぬ

蛭多きは種よき也
其持ぬ
蛭多きは種よき也
其持ぬ
蛭多きは種よき也
其持ぬ

一 蛭



蛭多きは種よき也
其持ぬ

蛭多きは種よき也
其持ぬ
蛭多きは種よき也
其持ぬ

一 蛭



蛭多きは種よき也
其持ぬ

蛭多きは種よき也
其持ぬ
蛭多きは種よき也
其持ぬ

一 蛭



蛭多きは種よき也
其持ぬ

蛭多きは種よき也
其持ぬ
蛭多きは種よき也
其持ぬ



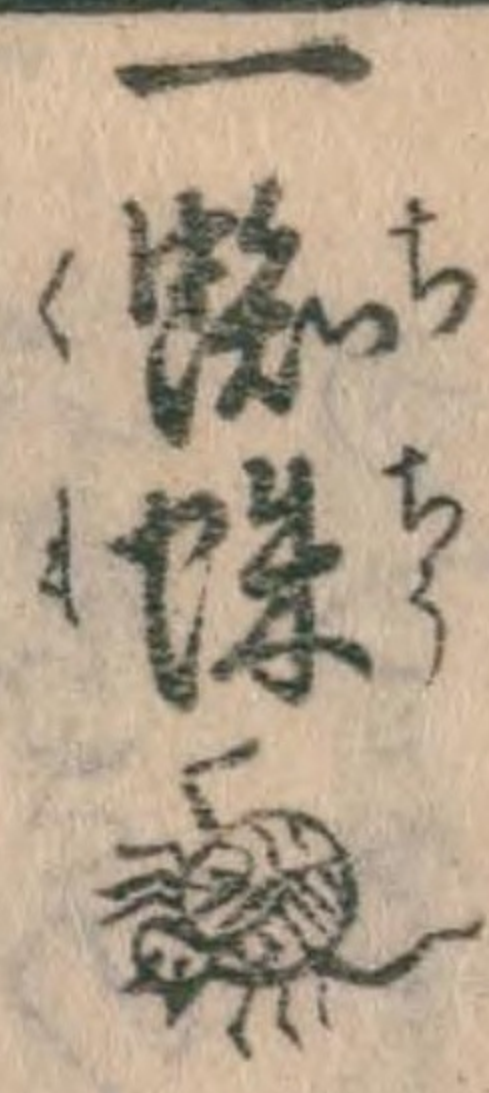
花壇

花



一 鶯 この鳥 木のてらを枝をくひりゆく鳥
みあやうくらくゆはる

けいももあはれをいしんとをふじま化して鳥
空とふもあはれをいし



一 蜘蛛 この蜘蛛 けいももあはれをいしんとをふじま化して鳥
みあやうくらくゆはる

あのかものゆきものこもやうなまはる
はるをいしんとをふじま化して鳥
空とふもあはれをいし



一 蟋蟀 この蟋蟀 まるくあはれをいしんとをふじま化して鳥
みあやうくらくゆはる

けいももあはれをいしんとをふじま化して鳥
空とふもあはれをいし



一 蜻蛉 この蜻蛉 まるくあはれをいしんとをふじま化して鳥
みあやうくらくゆはる

けいももあはれをいしんとをふじま化して鳥
空とふもあはれをいし

花壇



三三三

一 鳥 虫



け虫 節のまをさるふ
なまの虫たふ

け虫ハ尾ちかかのごうくをんともりて飛ハ

いぬごのぐーけいねさよ月ドク

まのをさるうあふよさこのふまよを控る

一 蜻 蝶



蜻 蝶 ちかかちかちか

夏のは小児のそそけふさうくをん
まきうりくまをさるのにわりけよい
おまど虫さるのまきうりくをん
ハ尾ちかかちかちか

一 蒼 虫



け虫 節のまをさるふ

一 響 虫



響 虫 ちかかちかちか

け虫ハ尾ちかかちかちか

○ 是をさるの虫のまをさるふ

陸 節のまをさるふ

なまの虫たふ



一 後虫 あがり   赤虫の二つあり又一粒
馬くちをある時あり

けい虫のやがごとくふくはくは虫をいひ
そ毒菊をよめりてそ毒をいひまをいひり
りて毒をもいひりて毒をいひり

一 豆油 あがり   けい虫のあがり
すいそをいひり

たをいひりて毒をもいひりて毒をいひり
そ毒をいひりて毒をもいひりて毒をいひり

○菜花色品之事

白部	白	白	白	白	白	白	白	白	白
黄部	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
赤部	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
青部	青	青	青	青	青	青	青	青	青
紫部	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫
緑部	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑
黒部	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒

菊花の部 四十八



さか
蓮
咲

丁子
内
種

増補
三

十六



千
系
の
部

さ
蓮
咲
抱

丁子
本
種

増補
三

十四



过那
抱花

丁子の
花



过那
平花

过那
抱花



丁子
花
葉



細管
花

丁子
花
葉



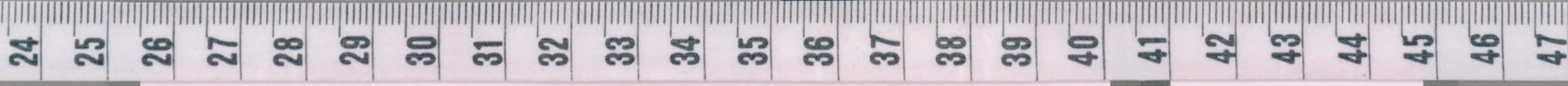
丁子
花
葉



丁子
透心
花
の
花
頃



八重
の
花
頃
丁子
透心
花
の
花
頃
七







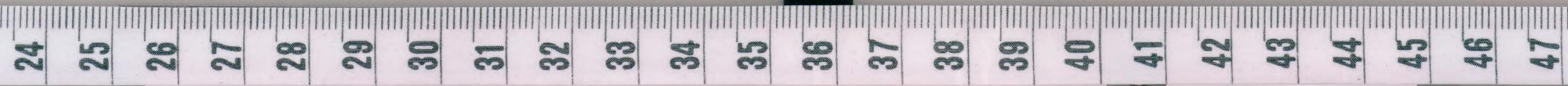
あ
丁子
もの
は
は

丁子
右
抱
嘆



丁子
細
嘆

堂
丁子
四
長
嘆





丁子抱子
候

丁子
候



○
丁子
候

丁子
候

丁子の
候





丁子の花びら抱く

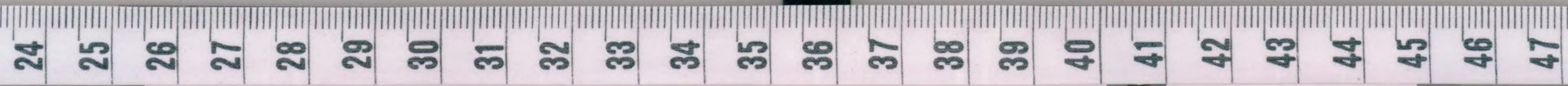
丁子花

の咲



丁子の花
抱く

丁子の
花





盛子
色が
く
候

丁子平
花
候



〇二二を
候

丁子細管
の
抱
候

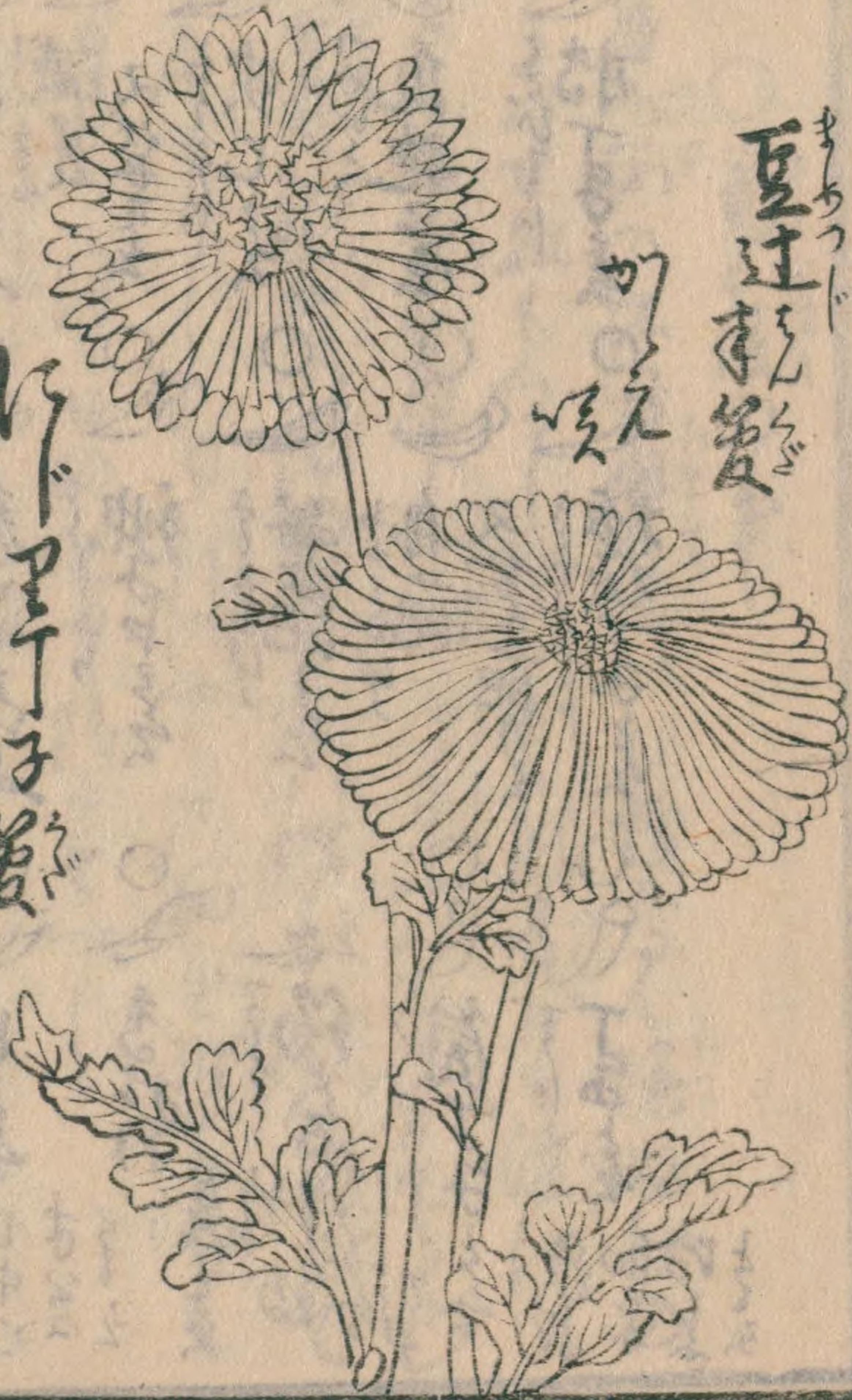
丁子
七
候





菊 花 図 説

ト
抱
候
ノ
ド
ア
子
巻



巨
越
花
巻
カ
ク
ハ
ク
ハ
ク

丸
子
が
り
花
巻



丸
子
極
抱
候

増補花壇大全

二七九

- 菊の肥の類 十の系
- 管とよ
- 巻葩とよ
- じとよ
- 又袋とよ
- 襖子とよ
- 多おね
- 夾じとよ
- 笹葩とよ
- 込釣とよ
- 瓜抱とよ
- 舟葩
- 崗丁子とよ
- 時丁子とよ
- 栲杖とよ
- 丁とよ

○ 菊の肥の類

一 瓜抱の比のるを種ハも種さく種ぬけの
 よしハせぬもさくハせぬも内敷ハも種ぬけ
 かがき後をさくハせぬ子又ハせぬもさくハせぬ
 又さくハせぬの比の日後ハ行くと種をさくハせぬ
 さくハせぬハせぬハせぬハせぬハせぬハせぬハせぬ
 ようかハせぬハせぬハせぬハせぬハせぬハせぬハせぬ
 ○ 花の肥の類

一 花の比のるを種ハも種さく種ぬけの



花分がかりも寝て時^{いぢりんおぬい}時^{いぢりんおぬい}梅^{いぢりんおぬい}後^{いぢりんおぬい}とさぐり
 実^{いぢりんおぬい}も^{いぢりんおぬい}く^{いぢりんおぬい}時^{いぢりんおぬい}六^{いぢりんおぬい}時^{いぢりんおぬい}後^{いぢりんおぬい}とさぐり
 又^{いぢりんおぬい}鴨^{いぢりんおぬい}居^{いぢりんおぬい}在^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}入^{いぢりんおぬい}令^{いぢりんおぬい}陰^{いぢりんおぬい}子^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}入^{いぢりんおぬい}る^{いぢりんおぬい}と^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}は
 沙^{いぢりんおぬい}紙^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}介^{いぢりんおぬい}さ^{いぢりんおぬい}る^{いぢりんおぬい}多^{いぢりんおぬい}く^{いぢりんおぬい}お^{いぢりんおぬい}好^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}合^{いぢりんおぬい}く^{いぢりんおぬい}む^{いぢりんおぬい}か^{いぢりんおぬい}道^{いぢりんおぬい}
 竹^{いぢりんおぬい}は^{いぢりんおぬい}後^{いぢりんおぬい}は^{いぢりんおぬい}た^{いぢりんおぬい}く^{いぢりんおぬい}軟^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}お^{いぢりんおぬい}ぬ^{いぢりんおぬい}て^{いぢりんおぬい}す



○梅^{いぢりんおぬい}後^{いぢりんおぬい}の^{いぢりんおぬい}尺^{いぢりんおぬい}方^{いぢりんおぬい} 甲^{いぢりんおぬい}二^{いぢりんおぬい}度^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}り^{いぢりんおぬい}ふ
 竹^{いぢりんおぬい}と^{いぢりんおぬい}さ^{いぢりんおぬい}り^{いぢりんおぬい}て^{いぢりんおぬい}二^{いぢりんおぬい}三^{いぢりんおぬい}度^{いぢりんおぬい}の^{いぢりんおぬい}器^{いぢりんおぬい}の^{いぢりんおぬい}い^{いぢりんおぬい}く
 う^{いぢりんおぬい}ら^{いぢりんおぬい}入^{いぢりんおぬい}紙^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}さ^{いぢりんおぬい}る^{いぢりんおぬい}時^{いぢりんおぬい}は^{いぢりんおぬい}さ^{いぢりんおぬい}り^{いぢりんおぬい}て

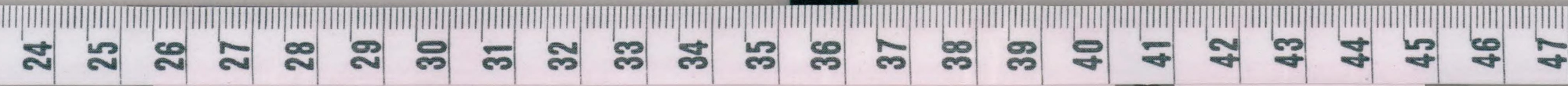


○梅^{いぢりんおぬい}後^{いぢりんおぬい}の^{いぢりんおぬい}尺^{いぢりんおぬい}方^{いぢりんおぬい}
 一^{いぢりんおぬい}年^{いぢりんおぬい}の^{いぢりんおぬい}葉^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}法^{いぢりんおぬい}々^{いぢりんおぬい}地^{いぢりんおぬい}方^{いぢりんおぬい}う^{いぢりんおぬい}尺^{いぢりんおぬい}七^{いぢりんおぬい}分^{いぢりんおぬい}許^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}く^{いぢりんおぬい}梅^{いぢりんおぬい}花^{いぢりんおぬい}
 て^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}も^{いぢりんおぬい}と^{いぢりんおぬい}押^{いぢりんおぬい}あ^{いぢりんおぬい}い^{いぢりんおぬい}屋^{いぢりんおぬい}ハ^{いぢりんおぬい}り^{いぢりんおぬい}紙^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}さ^{いぢりんおぬい}る^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}よ^{いぢりんおぬい}

○梅^{いぢりんおぬい}後^{いぢりんおぬい}の^{いぢりんおぬい}尺^{いぢりんおぬい}方^{いぢりんおぬい}
 一^{いぢりんおぬい}時^{いぢりんおぬい}の^{いぢりんおぬい}葉^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}法^{いぢりんおぬい}々^{いぢりんおぬい}水^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}押^{いぢりんおぬい}入^{いぢりんおぬい}令^{いぢりんおぬい}尺^{いぢりんおぬい}七^{いぢりんおぬい}分^{いぢりんおぬい}許^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}く^{いぢりんおぬい}梅^{いぢりんおぬい}花^{いぢりんおぬい}
 の^{いぢりんおぬい}さ^{いぢりんおぬい}ら^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}法^{いぢりんおぬい}々^{いぢりんおぬい}え^{いぢりんおぬい}の^{いぢりんおぬい}び^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}を^{いぢりんおぬい}さ^{いぢりんおぬい}る^{いぢりんおぬい}ま^{いぢりんおぬい}よ^{いぢりんおぬい}

増補花壇大全

三十三



○ 秘巻の事

一 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事
一 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事
一 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事
一 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事 秘巻の事

○ 草木極秘の事

一 草木極秘の事 草木極秘の事 草木極秘の事 草木極秘の事
一 草木極秘の事 草木極秘の事 草木極秘の事 草木極秘の事
一 草木極秘の事 草木極秘の事 草木極秘の事 草木極秘の事
一 草木極秘の事 草木極秘の事 草木極秘の事 草木極秘の事

一 凡そ木の口をくちぎるハ一而も挿金ふべし
わらちて挿ぐ一ハ木を挿入する時ハ木の口を
口の挿ぐ物なり。連社も木の口をくちぎる

○樹木を挿ぐ法の事

一 凡そ木の挿ぐハ正月と正月とよく上とを二月と中とし
二月と下の時とをいふは正月法を挿ぐは正月
又木の口をくちぎるは正月と正月とよく上とを二月と中とし
凡そ木の挿ぐハ正月と正月とよく上とを二月と中とし
必る木の挿ぐハ挿ぐは正月と正月とよく上とを二月と中とし

一 樹木を挿ぐハ正月と正月とよく上とを二月と中とし
凡そ木の挿ぐハ正月と正月とよく上とを二月と中とし
又木の口をくちぎるは正月と正月とよく上とを二月と中とし
凡そ木の挿ぐハ正月と正月とよく上とを二月と中とし
必る木の挿ぐハ挿ぐは正月と正月とよく上とを二月と中とし

樹木を挿ぐ

挿ぐ

先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて
先づ根と樹をくわきとて

一度ぐ水とそとぐ金一
竹本とそとそと樹本と
竹本とそとそと樹本と
竹本とそとそと樹本と
竹本とそとそと樹本と
竹本とそとそと樹本と
竹本とそとそと樹本と
竹本とそとそと樹本と
竹本とそとそと樹本と
竹本とそとそと樹本と

増補の
花壇



○ 果木に植る法

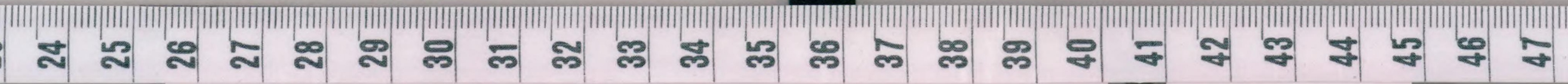
一 凡 果木と植るふ花ある時ハ種をばうば植あるこ
 かりきしハは下のぶらに活あるもあてもむの
 比植れなきハ種を種之先果木と移し種んせ
 九月の中旬に種を果木にまき
 種を種まきしより種をばうば植るは
 肥去と入くあをとりて種を種んせ
 種を種んせ種を種んせ種を種んせ種を種んせ
 種を種んせ種を種んせ種を種んせ種を種んせ

はきめむべし
 種を種んせ種を種んせ種を種んせ種を種んせ
 種を種んせ種を種んせ種を種んせ種を種んせ
 種を種んせ種を種んせ種を種んせ種を種んせ

○ 又法 凡 果樹と植るふ花を種んせ種を種んせ
 先乾きとたしをばうば種を種んせ種を種んせ
 又種を種んせ種を種んせ種を種んせ種を種んせ
 種を種んせ種を種んせ種を種んせ種を種んせ
 種を種んせ種を種んせ種を種んせ種を種んせ

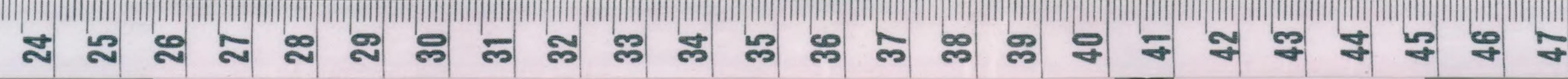
果木の種

八七



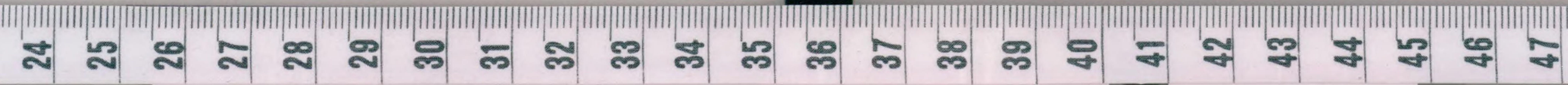
○樹をよぶ名あり自水の植種あり事
一 新氏要例に凡て木の樹を以て木を以て樹の
淡陽と名へて樹易なる事ありこれより
得る名ありとの事 せん 植人とす あ 時を木の あ 角を
りく あ 木とす あ 木を あ 木とす あ 木の
常よみる方よし あ 木とす あ 木とす あ 木の
白く あ 木とす あ 木とす あ 木の
又花多し切らるる あ 木とす あ 木の
種へ あ 木とす あ 木の

一 法本に南方より木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者
木の種あり種れざる者 あ 木の種あり種れざる者



右は書きたるをくもて後文宣のむらじを
 かくしたるの書にたりたるをすみの成
 実おもたてりてある一山中の傍梨樹
 櫻林橋ありしに傍梨樹ありしに
 海邊及び沙地は蜜柑全橋梨小樹
 ありし傍梨樹をくもて一山中あり
 宣公の沙地は宣公の沙地は宣公の
 一山中ありし傍梨樹ありしに
 傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに
 傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに

後圓の官一者くもて樹の性をくもて
 樹の性をくもて
 一丸の傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに
 秋海棠の傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに
 日陰の傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに
 一傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに
 傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに
 傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに
 傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに
 傍梨樹ありしに傍梨樹ありしに



花壇

十一

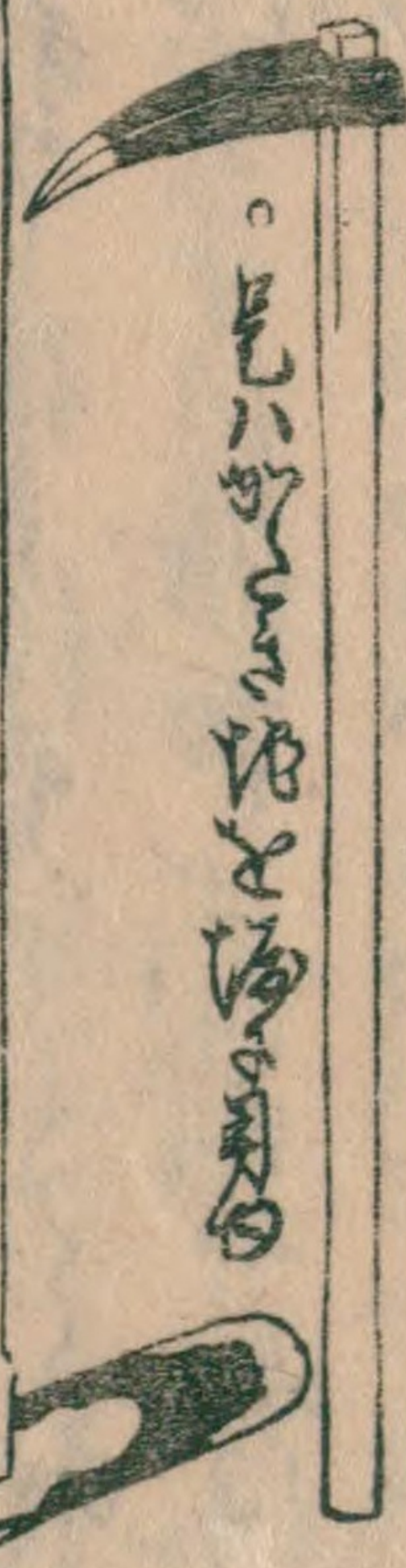
○花壇の用金と法及上事

○鑿くわ

○鏝すき

○釋とぎ

○尖棒とがりぼう



○是ハ花壇の地を掘る用の

○是ハ花壇の地を掘る用の

○是ハ花壇の地を掘る用の



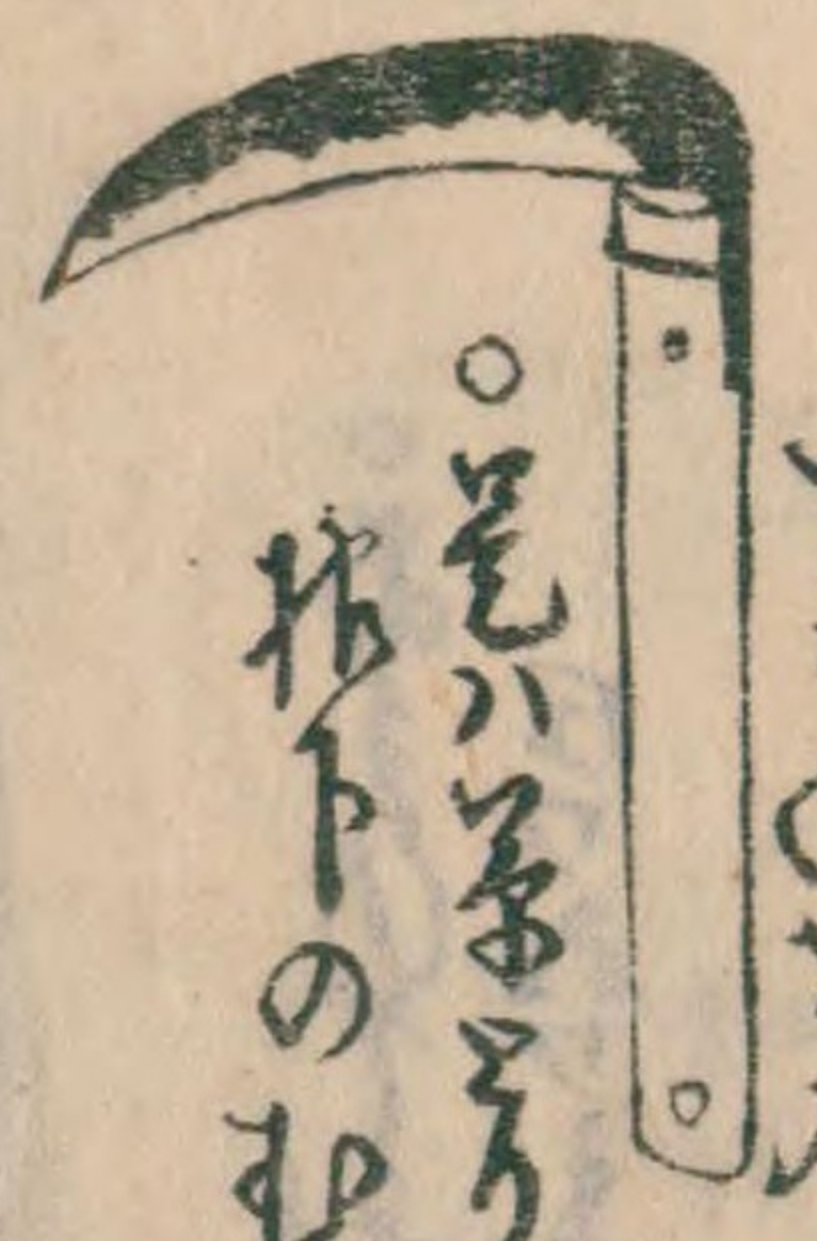
○是ハ花壇の地を掘る用の
○是ハ花壇の地を掘る用の
○是ハ花壇の地を掘る用の

○鉄鋏てつがは



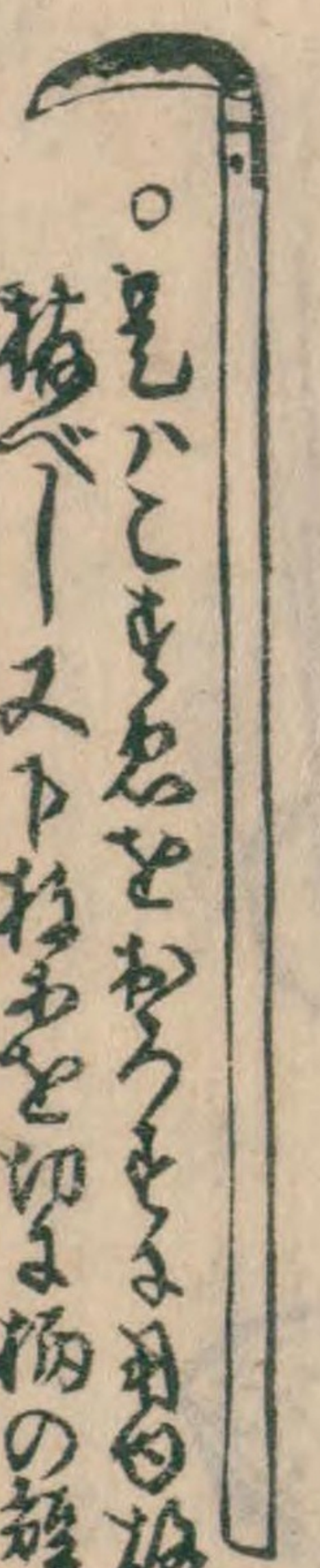
○是ハ花壇の地を掘る用の
○是ハ花壇の地を掘る用の
○是ハ花壇の地を掘る用の

○鉄鉤てつこう



○是ハ花壇の地を掘る用の
○是ハ花壇の地を掘る用の

○小鎌こがま



○是ハ花壇の地を掘る用の
○是ハ花壇の地を掘る用の

ひしぎ
○木杓
あびびざり
○鯉殻



○あしひがし或ハあしひがし
口つらつらもはきざり



○竹剪

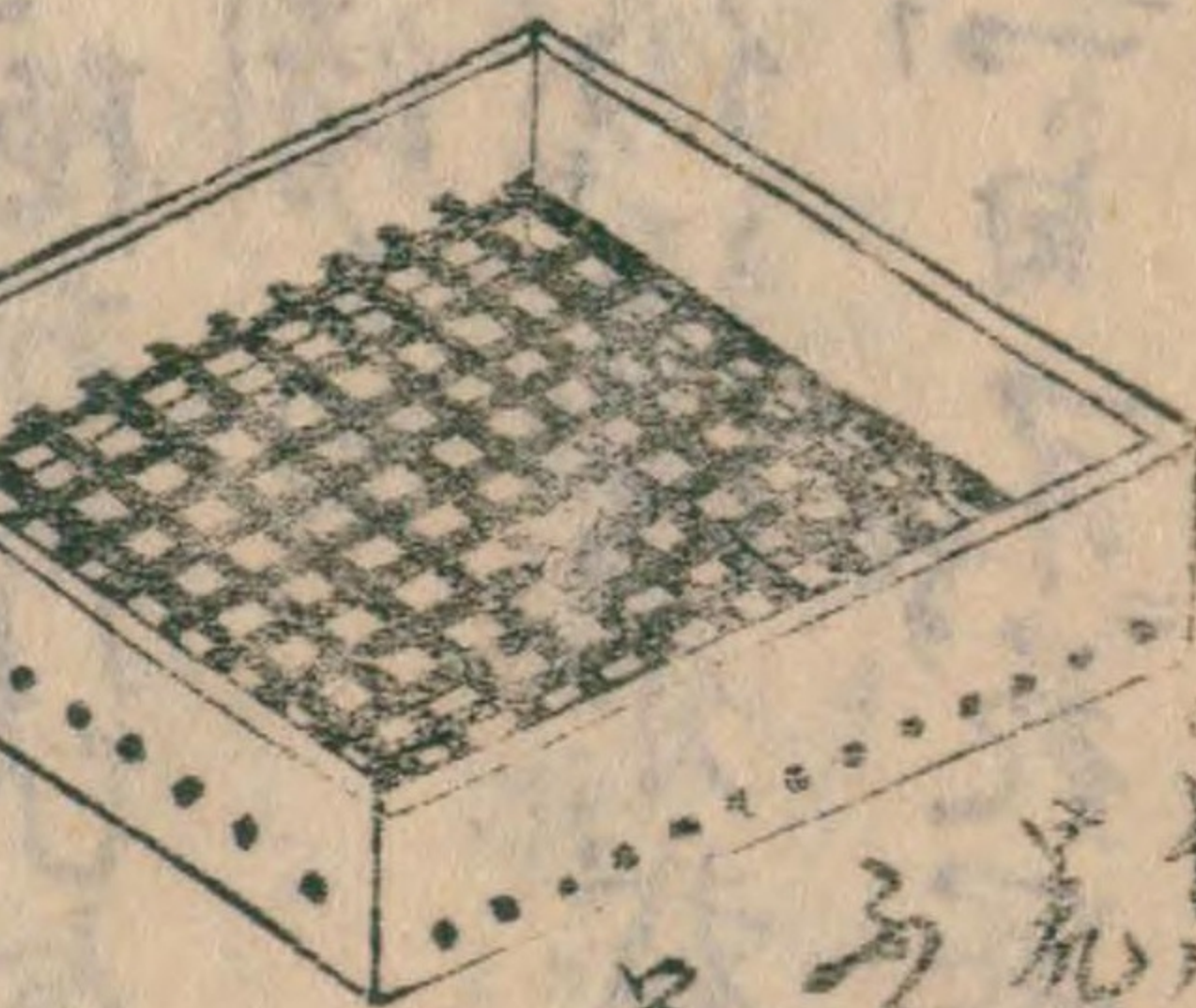
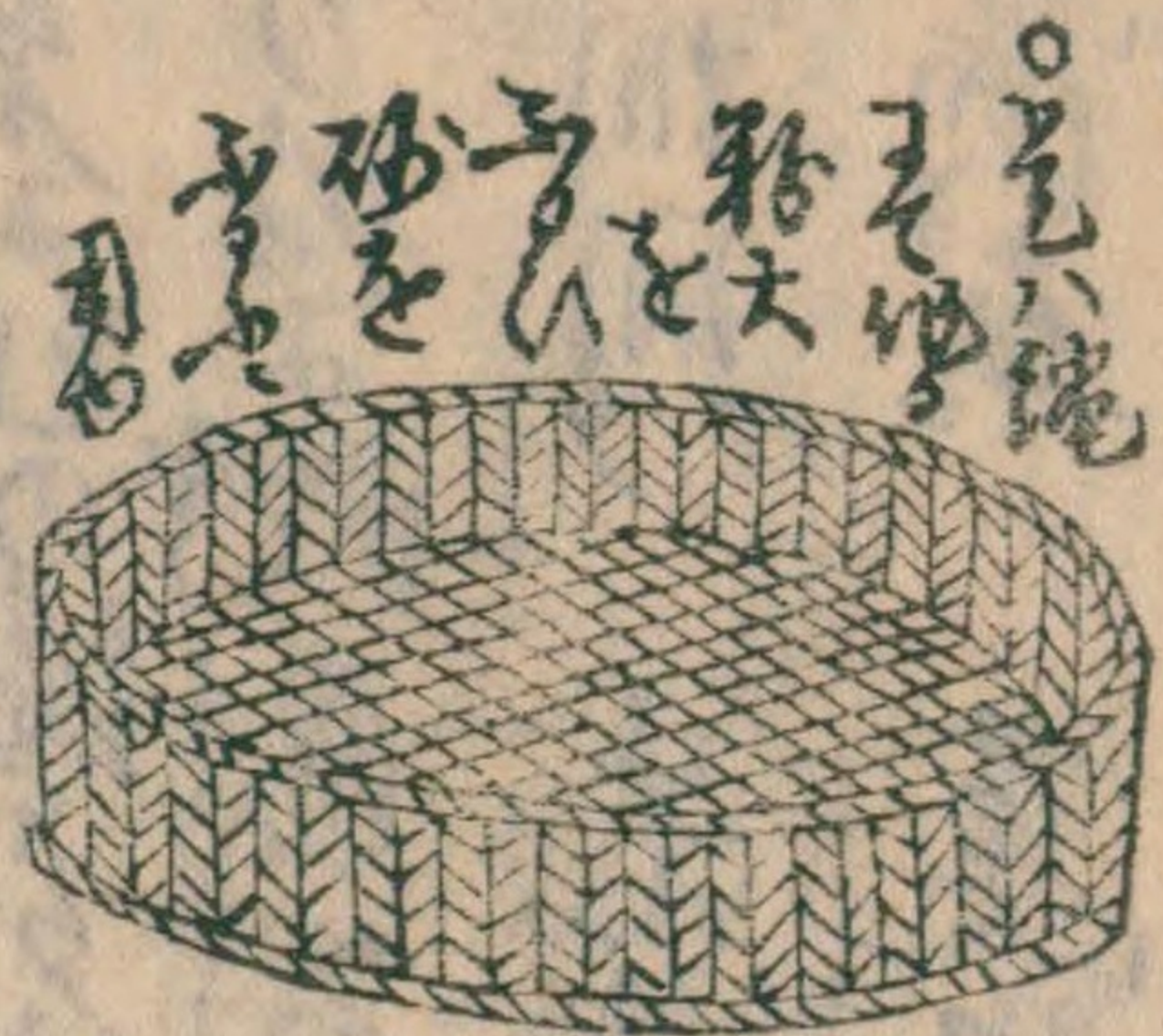


○あしひがし或ハあしひがし
口つらつらもはきざり



○あしひがし或ハあしひがし
口つらつらもはきざり

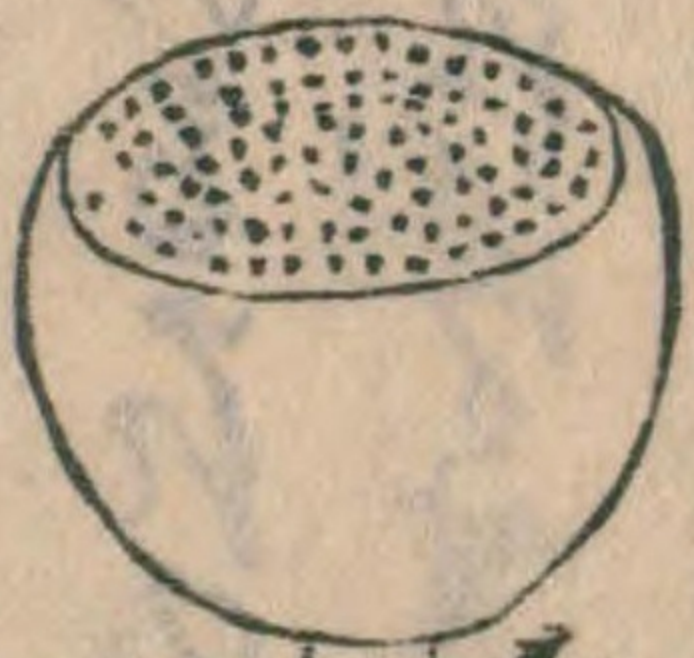
こめふさい
○細土篩



○あしひがし或ハあしひがし
口つらつらもはきざり

あしひがし
○粗土篩

あしひがし
○噴壺



○あしひがし或ハあしひがし
口つらつらもはきざり

○右之介 椽 孫 糸 條 竹 糸 月 意 一 七 宜
右之介の好む右よりしてくまき首飾

○園と作このふんめ有念ん事

一凡トの樹やうをくたらぬとせしらるるんん最た後後治治身身として
い時ト十二二月月ののるるたたのの終終るる所所極極意意心心履履是
きぎぎししもも終終時時のの室室をを海海ちちををししににしし終終るる
室ををししりりももにに身身をを心心のの終終るる所所極極意意心心履履是
しくくおお要要ををりりなな政政陽陽公公のの侍侍をを回回

浅深紅白相間ツ 先後仍須治身裁

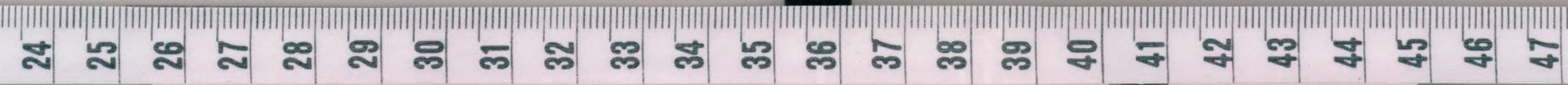
我欲に時携酒をを 莫教一日不花花死死

○室みんちう中ちゆうよよ道だうとと室むろをを室むろ事じ

一凡みんちう室むろ中ちゆうよよ道だうとと室むろをを室むろ事じ
ままま一一後後のの若若細細八八室室をを三三徑徑をを室むろとと陶陶淵淵明明八八六六
徑をを用用とと室むろのの揚揚滅滅毋毋八八六六徑徑をを用用とと一一徑徑とと小
花のの塵塵をを海海めめししままりりかかくくののややくく小小徑徑をを知知るるととて
十二二月月のの心心をを海海のの終終るる所所極極意意心心履履是
三徑徑初初開開是是持持はは 再再室室三三徑徑有有別別明明
誠齋齋奄奄有有三三徑徑 一一徑徑花花開開一一徑徑終終

○こまなれ種とちまは
一 伝承次第の種子はよく熟入り熟したるを
取れ免てよく座敷を種に入らざるは入り
抑まべし根痛ひありて古種をふる
ゆへ一 或る種のけまゆへ一 宝倉一 如け
まの時の種とちまへて古種をふる
一 伝承次第の種子はよく熟入り熟したるを
取れ免てよく座敷を種に入らざるは入り
抑まべし根痛ひありて古種をふる
ゆへ一 或る種のけまゆへ一 宝倉一 如け
まの時の種とちまへて古種をふる

より乾くを棄てたる地へ前ちしてこまを
よく耕がごこくありて根をふるはしむ時を
ゆへそよの種子と耐暑まべし。又漢種
せんよまへて種を漬くはよく漬るは半つるを棄
てたるを棄てたるを棄てて五月の布て種を
とらぬ種とちまへて一 或は抑まらざるをふる
ゆへ一 ちまをふるまふ一切の種子をふるは
まふはよくふるはよくふるはよくふるはよくふる
まふはよくふるはよくふるはよくふるはよくふる
まふはよくふるはよくふるはよくふるはよくふる



一 草木の移子と咲くげどがたぬをのたぬ
○ 細く 細くを令種べし 実れは粒なる
もろくちとせし 葉はひくし 葉の細なる
あつたに古たぬを令種べし 実をとりてはせむ

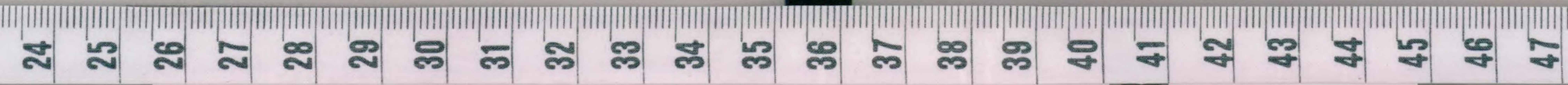
○ 枝と挿法

一 挿木とせむるは 正月に葉をよし 二月に葉を
よし 物よりよく 葉をよし 葉をよし 二月に
よし 葉をよし 葉をよし 葉をよし 二月に
葉をよし 葉をよし 葉をよし 葉をよし 二月に

田舎に木を移すの法を記す 宜し 凡そ木を
移すに 水はよく 土はよく 葉はよく 葉はよく
水はよく 土はよく 葉はよく 葉はよく 二月に
葉をよし 葉をよし 葉をよし 葉をよし 二月に
葉をよし 葉をよし 葉をよし 葉をよし 二月に

増補の四

廿六



とうふ木をわけきりて多くとて産ひに賣ま
 へば水をもとめて一月の夜はまぬ水と
 してさても害よし一冬六相を復ともなす
 榎木のるまきん中おまき



○ちくしとぎと口と芽がらうち根うきは
 おづりてさして地まじむもふく風し
 根とらふはさぬり

けりてさきと
 けりてさきと

○榎木うく根れ
 楊柳 檉 柘 柳 松 柏 唐松
 山藜 薔薇 樺 海棠 山茶 木芙蓉
 月多花 無花果 迎春花 牡丹花
 ○ちくしとぎと口と芽がらうち根うきは

○榎木の木根の事
 赤土 黄土 沙 焼酒の粕
 右等分よみ合し水とくうくろくろれ
 焼くといりふつなぐあそとげさく根をば

増補花壇

二二



一 枝の切

一 枝の切

○ 一本と接法

一 凡そ木と接するものは、先づ其花を穿てて、
その根の切を切て、其根をさし、
古くは、是れを接せしむるに、
其根を切て、其根をさし、
其根を切て、其根をさし、



根を切て、其根をさし、
其根を切て、其根をさし、

○ 厭條の法

一 厭條とは、先づ木の中樹の下の枝のちよと、
その枝を切て、其根をさし、
其根を切て、其根をさし、
其根を切て、其根をさし、
其根を切て、其根をさし、
其根を切て、其根をさし、

増補花壇

増補花壇



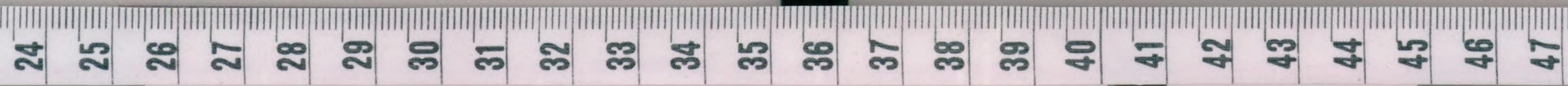
根接合と穂の中と片をさへはよとてても
 切らあはも表の方よりかーをすよて死て口
 うみかへ生れを脚くぬー根接合の皮骨
 のらと小刀さかー切てぬくあらうはを
 ーさへくちの接穂とさー^{つぎに}ぬく^{。但一はさかの}
 昔は對一はさかの皮はる^{昔ハさかの}
 春木の皮は對皮さきなり^{根さへれんあまよこく}
 わくやさかちさー^{かこもあへく接合さちさく}
 まれくると穂の動くあまよすべー^{但さあ}
 ゆらぬばあさく^{ばらぬならんとすこらうさ}

左のうへを福をさめくようぬりて竹の皮さきく
 けらぬぬの入ぬさうさきべー^{接穂をりててん}
 かつげ竹の皮さきく^{かきひとさき}^{九はあは}
 接よ長分の昔はさき^{十春あはぬ木とけさぬうび}
 夏あのはなは木と穂さき^{うびあはは}

○接木仕方の図



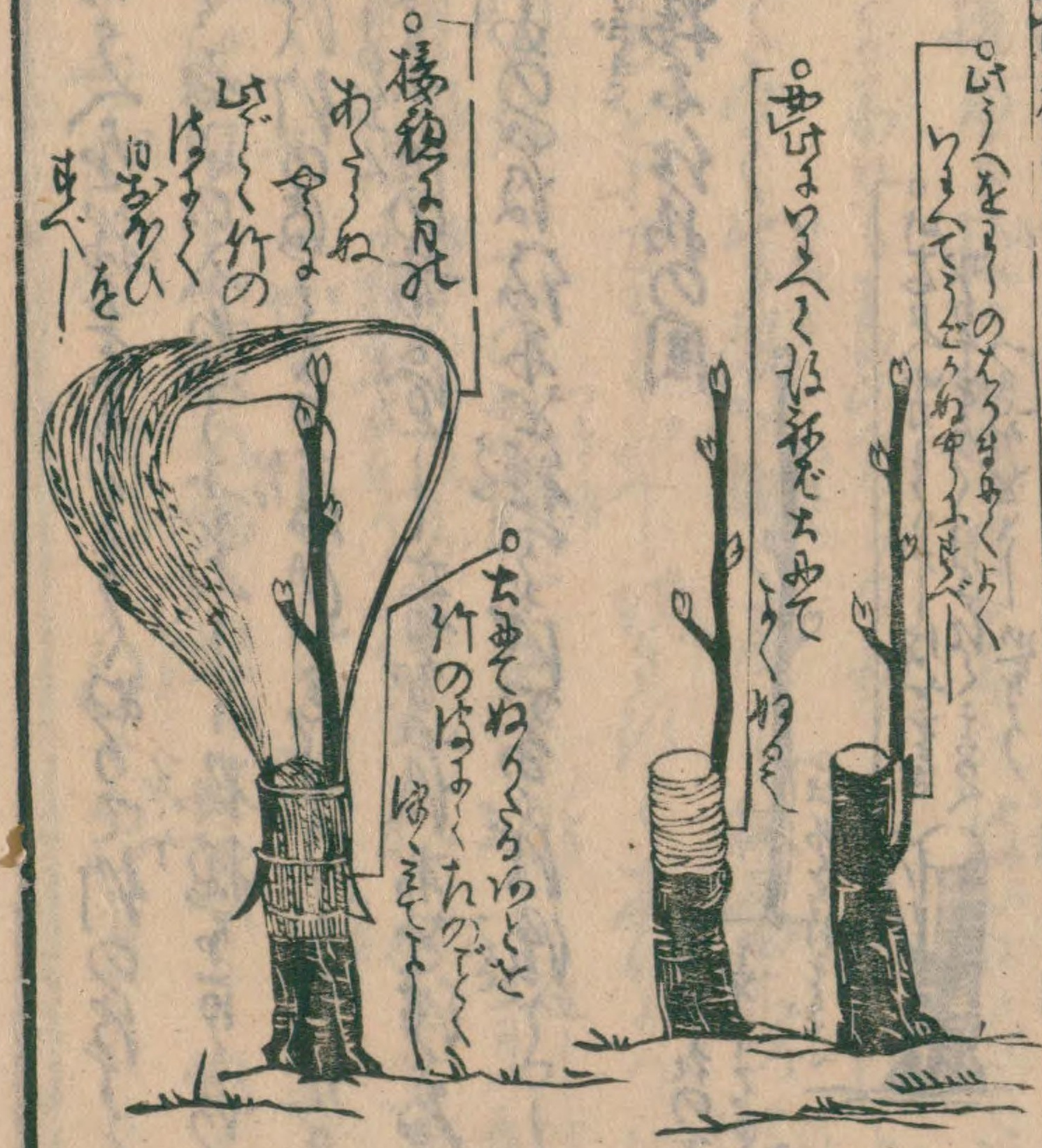
〇はちと竹をさきぬ
 〇はちと表のちさう
 かーとさきぬ



竹のつぎ



一 竹をどきぐよ藤木大あらのハ着あまをさうけり切て
 根搦物も枝も切てさうけり切まのどく地ま
 ちくくるとまやとまふちよ接合しあま藤木中ハ
 間かしきく切てたのどくよ接く竹のほきま
 ろくけりみく水の入あうもあてま藤木あて
 けりよちのほきまをまへ一ちくやくまきれは活あし



竹のつぎ

24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47

○中接の法 スルセは...

一 法樹と接すは中接を泥やき... 切て... 中接とほをけ... せいで...

○中接の図

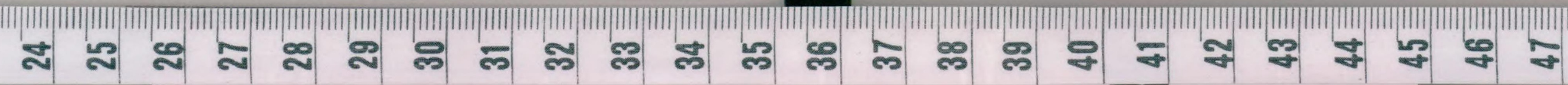


○中接の仕法

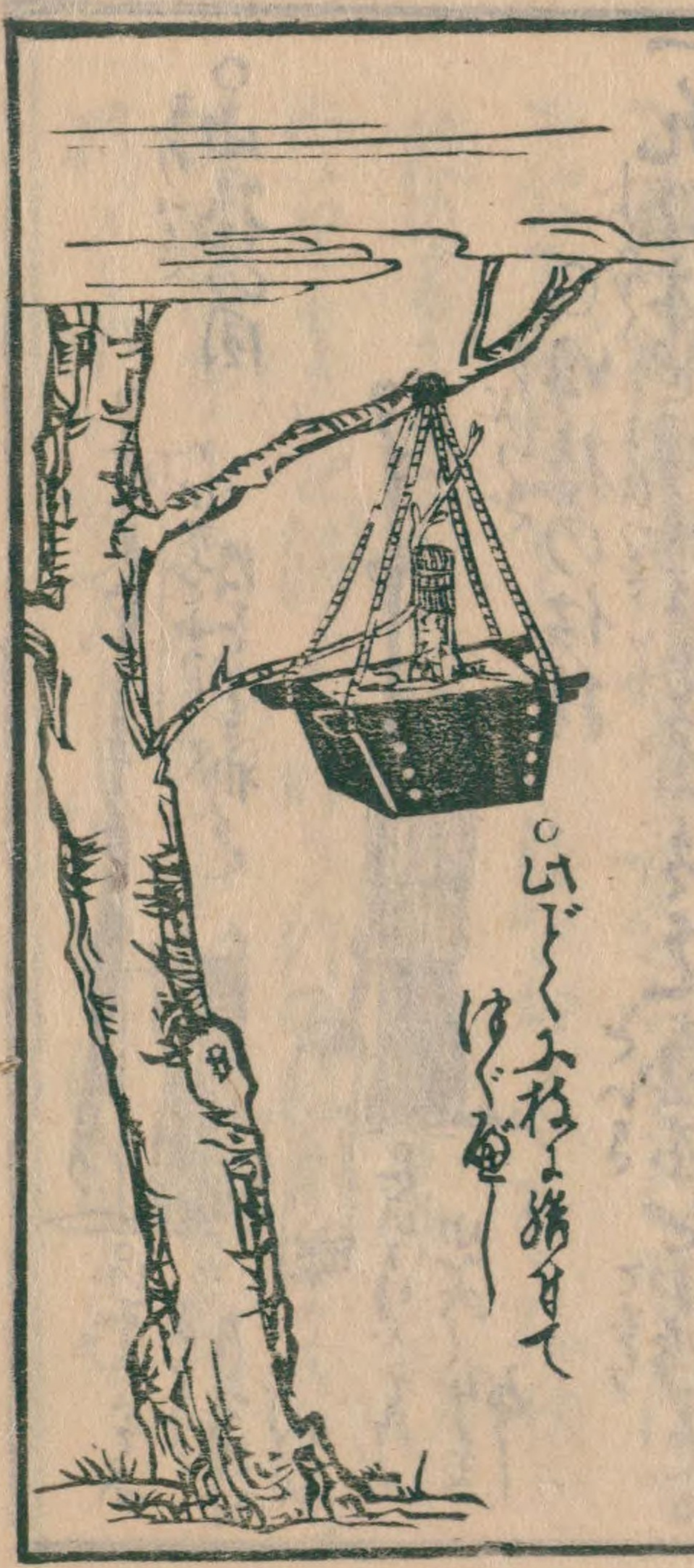
一 凡法本と接接すは... せは... 接すても... 樹のこへ...

三十一

三十一



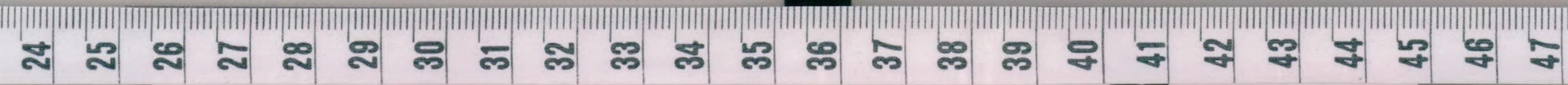
藤のつらばし
 藤のつらばし
 藤のつらばし
 藤のつらばし
 藤のつらばし
 藤のつらばし
 藤のつらばし
 藤のつらばし
 藤のつらばし
 藤のつらばし



一人の目も手も接しは歩の足をなす 接穂小
 是をぬりて接しは歩の足をなす 接穂小
 一葉の樹も揚梅をばげば破り梅をば者は
 破りて新葉と接しは歩の足をなす 接穂小
 初穂をつる者は清き多く実のる之れ一切乃
 是をぬりて接しは歩の足をなす 接穂小
 一接穂の産りては歩の足をなす 接穂小
 接穂の産りては歩の足をなす 接穂小
 接穂の産りては歩の足をなす 接穂小
 接穂の産りては歩の足をなす 接穂小

接穂のつらばし
 接穂のつらばし

接穂のつらばし
 接穂のつらばし



○ 獲果の法

一 凡 果木を剪り去るハ先づ樹の根を切らば
さくさく小枝或る枯枝を切去べし 二月末ハ
根も亦小堀を掘り 又其の社内は果木の根と
はさきしむればさきさきさきさきと成りて
さきさきと成りて成りて成りて又其の
さきさきと成りて成りて成りて成りて

一 密林を剪り去るハ先づ樹の根を切らば
さくさく小枝或る枯枝を切去べし 二月末ハ
根も亦小堀を掘り 又其の社内は果木の根と
はさきしむればさきさきさきさきと成りて
さきさきと成りて成りて成りて成りて

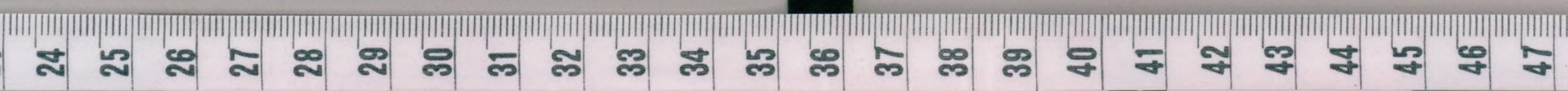
切らば 一 又 樹根を切らば 二月末ハ
根も亦小堀を掘り 又其の社内は果木の根と
はさきしむればさきさきさきさきと成りて
さきさきと成りて成りて成りて成りて

一 凡^く花^がを^ましの^まん^しを^おお^はす^は十^し日^に極^く極^く
 一月の間に樹の根を把^とりて守^もり守^もり
 活^わか^しめ^る一^は月^の内^に極^く極^く
 一 花^の根^を掘^りてお^きてお^きてお^きて
 一と^して^とり^てお^きてお^きてお^きて
 一 花^の根^を掘^りてお^きてお^きてお^きて
 活^わか^しめ^る一^は月^の内^に極^く極^く
 活^わか^しめ^る一^は月^の内^に極^く極^く

一 花^の根^を掘^りてお^きてお^きてお^きて
 又^も本^のを^掘りてお^きてお^きてお^きて
 一 園^の中^にお^きてお^きてお^きて
 活^わか^しめ^る一^は月^の内^に極^く極^く
 活^わか^しめ^る一^は月^の内^に極^く極^く
 一 花^の根^を掘^りてお^きてお^きてお^きて
 活^わか^しめ^る一^は月^の内^に極^く極^く
 活^わか^しめ^る一^は月^の内^に極^く極^く
 一 花^の根^を掘^りてお^きてお^きてお^きて
 活^わか^しめ^る一^は月^の内^に極^く極^く

花壇

花壇



○花束の法とちり

一 花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり

一 花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり
花束の法とちり

○草木の毒物事

一人糞 人尿 洗滌水 毒の糞 鴉糞

臭汁 于海鰻炙 竈灰 せりの泥水

死猪 死鼠 溝泥 河泥 苦菜汁

茶汁 沖湯 豆腐滓 電燒土 腐草

金りきりまき草

たしお多しを物まきこびく百ありうけし
のどろあき攪く月白金砂の糞は者ぞじし
む八倍一糞まき花を毒りやこいたとハ毒也

中
と掃と洗ひ石をかく玉とみぐくがど

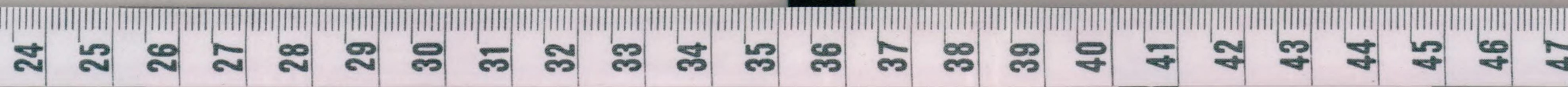
○第一は毒物の性質事

一凡と毒物毒物をどうゆけし加減事

○二月、毒五分、水七分。三月、毒四分、水七分。四月、毒三分、水七分。

○七月、毒二分、水八分。八月、毒一分、水九分。十月、毒一分、水二分。

○十一月、毒一分、水九分。○十二月、毒一分、水二分。



○樹木の養生の仕法事

一 凡樹木の養生をせむるは人養の如く一層を
きりて用むべし一痛むるは重し一葉を
去分おはさずさしげ用ひてし一
一 樹木に二枚の比をてはみねをせしむ時
新根も又生長せしむ下ニ葉をせしむ根痛
て折るゝ葉事の折芽をさしむるはせむる如く
すし中び六月木の時の木の折をせしむ
と樹木の根をさす物も又八月も可くせむ

八月は海とれ細根をけはし時葉をせむるが
枯るゝ七の月をさすは葉をさす如くせむるに
叶て一切の樹木は養生をせむるは十一月十二月
一月は二ヶ月をさす一休むる時あり
一 樹木の養生をせむるは一或るは養生をせむるに
せむるは一葉をせむるは一葉をせむるは一
一 葉木の芽をさす時葉をさす如くせむる根を
やがては折る如くあり一葉をさすは葉のむす
は折る如くあり一葉をさすは葉のむす

二七

二七



特1
2510

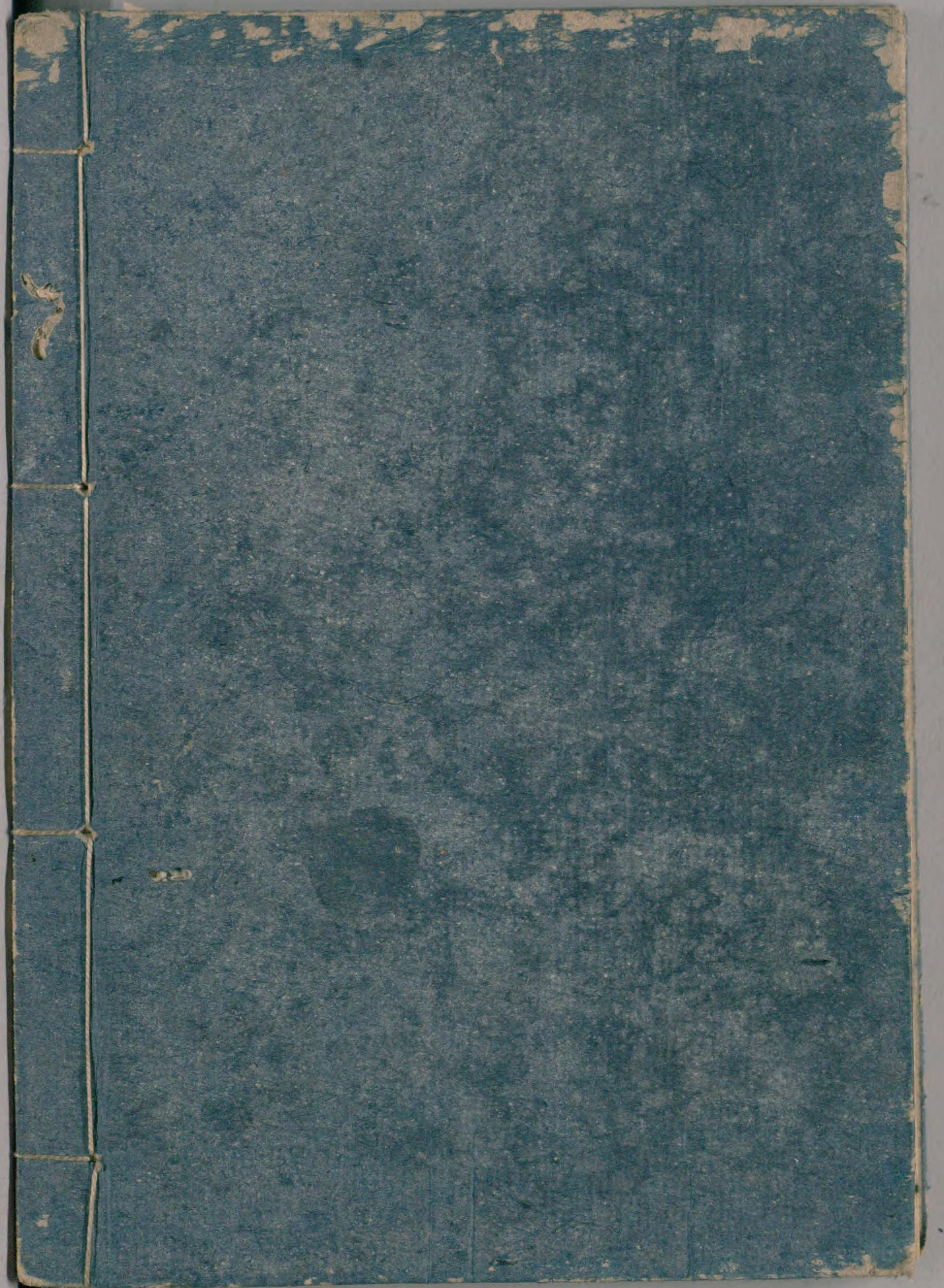
○ 尾去の事

△ 京師云 尾去の名去といふはあはれなり
尾去と種地を以て集積して肥良の
土なり尾去もあはれの名なり

泉涌寺赤石 泉涌寺をいふは尾去なり
泉涌寺の事

七條と云 尾去の事
尾去の事

尾の上と云 尾去の事
尾去の事



国立国会図書館

タイトル『増補花壇大全 6巻』 請求記号 特1-2510

ガラス使用